

六月に入ると、麥は黄熟して刈取られ、胡瓜の莖短かきに花を有ち、水草のある處には螢が闇を縫つて飛んだ。ほそぬ、ゆきのした、のびる、どくたみ、かもじぐさ、なほしるいちご、つゆぐさなどが咲いた。雨は降つては晴れ、晴れてはまた降つた。ある日、美穂子の兄からめづらしくはがきが届いた。かれは士官學校を志願したが、不合格で、今では一年志願兵になつて、麻布の留守師團に居た。『十中八九は戦地に赴く望みあり、幸に祝せよ』と得意さうに書いてあつた。それに限らず、かれは野から島から町から鋤犁を捨て算盤を捨て筆を捨て、國事に赴く人々を見て、心を動かさざるを得なかつた。海の外には同胞が汗を流し血を流して國の爲めに戦つて居る。其處には新しい意味と新しい努力がある。平生政見を異にした政治家も志を一にして公に奉じ、金を守るに専らなる資本家も喜んで軍事公債に應じ、舉國一致、千載一遇の壯舉は着々として實行されてゐる。新聞紙上に

は日毎に壯烈なる最後を遂げた士官や、勇敢なる偉勳を奏した兵士の記事を以て滿され、それにつゞいて各地方の團隊の熱心なる忠君愛國の状態が見るやうに記されてある。『自分も體が丈夫ならば——三年前の検査に戊種など、いふ憐むべき資格でなかつたならば、滿洲の野に、わが同胞と共に、銃を取り劍を揮つて、僅かながらも國家の爲めに盡くすことが出来たであらうに』などと思ふことも一度や二度ではなかつた。かれはまた第二軍の寫眞班の一員として従軍した原杏花の従軍記の此頃『日露戦争實記』に出始めたのを喜んで讀んだ。戀愛を書き、少女を描き、空想を生命とした作者が、或は砲烟の漲る野に、或は死屍の横はれる塹壕に、或は機關砲の凄じく鳴る丘の上に、其のさまざまの感情と情景を叙した筆は、少くともかれの想像を其處につれて行くのに充分であつた。三年前にイタリヤンストロウの意氣な帽子を被つて、羽生の寺の山門から入つて來た其人——酔つて詩を

吟じて果ては本堂の木魚や鐘を敲いた其人が、第二軍の司令部に從屬して、其の混亂した戦争の巴渦の中に入つて居るかと思ふと、一層其記事が分明と眼に映るやうな氣がする。急行軍の砲車、軍司令官の戦場に赴く朝の行進、砲聲を前景にした茶褐色の禿げた丘、其の急忙の中を、水筒を肩からかけ、ピストルを腰に巻いて、手帳と鉛筆とを手にして飛んで歩いてゐる一文學者の姿をかれは美しく思つた。

ある日和尚さんに、

『原さんからも御傾がありますか』

と聞くと、

『え、此間金州から繪葉書が來ました』

と和尚さんは机の上から軍事郵便と赤い判の押してある一枚の繪ハガキを取つて示し

た。それには同じく從軍した知名な畫家が死屍の傍に菖蒲が紫に咲いて居る處を描いて居

た。『好い紀念ですな』

『え、かういふ花が澤山戦場に咲いてると見えますな』

『戦記にも書いてありましたよ』

と清三は言つた。

四十九

梅雨の中に一日カツと晴れた日があつた。薄い灰色の中から鮮やかな青い空が見えて、光線が漲るやうに青葉に照つた。行田からの歸途、長野の常行寺の前まで來ると、何か事が

あると見えて、山門の前には人が多く集つて、がやくと話して居る。小學校の生徒の列も見えた。

青葉の中から白い旗が靡いた。

戦死者の葬式があるのだといふことがやがて解つた。清三は山門の中に入つて見た。白い旗には近衛歩兵第二聯隊一號卒白井倉之助之靈と書いてあつた。五月十日の戦に、鑿河の右岸で戦死したのだといふ。フロックコートを着た知事代理や、制服を着けた警部長や羽織袴の村長などが皆會葬した。村の世話役が彼方此方に忙しうに其處等を歩いて居る。遺骨を藏めた棺は白い布で巻かれて本堂に据ゑられてあつた。丁度主僧の御經が濟んで知事代理が祭文を讀むところであつた。其の太い錆びた聲が一しきり廣い本堂に響き渡つた。やがてそれに續いて小學校の校長の祭文がすむと、今度は戦死者の親友であつたとい

ふ教員が、奉書に書いた祭文を高く捧げて、震へるやうな聲で讀み始めた。其聲は時々絶えて又續いた。嗚咽する聲が彼方此方から起つた。

柩が墓に運ばれる時、廣場に集つた生徒は兩側に列を正して、整然としてこれを見送つた。それを見ると、清三は堪らなく悲しくなつた。軍司令部と一緒に原杏花が出發する時小學校の生徒が兩側に整列して、萬歳を唱へた。其時ければ、「爾、幼なき第二の國民よ、國家の將來はかゝつて汝等の双肩にあるのである。健在なれ、汝等幼なき第二の國民よ」と心中に絶叫したと書いてある。其時ほど熱い涙が胸に迫つたことはなかつたと書いてある。清三も今さうした思に胸が一杯になつた。幼ない第二の國民に柩を送られる一戦死者の靈――

砲煙の漲つた野に最後の苦痛を味つて冷たく横つた一兵卒の姿と、かうした梅雨晴の鮮

かた故郷の日光の下に悲しく營まれる葬式のさまとが一緒になつて、清三の眼の前を通つた。

「何うせ人は一度は死ぬんだー」

かう思つたかれの頬には涙がこぼれた。

かれはいつか寺を出て、例の街道を歩いて居た。光線はキラ／＼した。青葉と青空の雲の影とが野の上にあつた。

二三日前から頼りに報ぜられる壹岐沖の常陸丸遭難と得利寺に於ける陸軍の戦捷とが繰返し繰返へし思出される。初瀬吉野宮古の沈没なども考へて、『果して、最後の勝利を占めることが出来るだらうか』といふ不安の念も起つた。

野にたう草があるのを見て、それを採つた。傍にある名を知らぬ赤い草花は學校の花

壇に植ゑやうと思つて、根から掘つて紙に包み、汚れた手を見そはぎの茂る小川で洗つた。ふと一昨日浦和のひで子から來た手紙を思ひ出して、考へそれに移る、羽生に移つてからの新家庭に、その明かな笑顔を待たならば、いかに幸福であらうと思つた。かれは此頃ひで子自分の家庭にひきつけて考へることが多くなつた。

羽生町の入口では、東武鐵道の線路人夫が頼りに開通工事に忙しがつて居たが、其傍の蕨茸家には、色の褪めた國旗がヒラ／＼と日に光つた。

五十

羽生に移轉する前日の日記に、かれはかう書いた。

『廿六年故山を出で、熊谷の櫻に近く住むこと數年、三十三年に於て處忍沼のほとりに

移りてより、又數年を出でずして蝸牛のその如く、又も重からぬ積を貰ひて、利根河畔羽生に移らんとす。奇しきは運命のそれよ、面白きは人生のそれよ、回顧一番、笑つて昔古びたる城下の縁を出で、去らんのみ。歴史の章は斯の如く、又かくの如くして改められん』

羽生の大通を鳥渡裏に入つた處にその貸家があつた。探して呉れたのは萩生さんで、持主は二三年前まで、通で商賣をして居た五十ばかりの氣の好ささうな人であつた。下が六疊に四疊半、二階が六疊、前に小さな庭があつて、其處に丈の低い柿の木が繁つて居た。家賃が二圓五十錢、敷金が三分あるのだが、萩生さんのお友達ならそれはなくつても好いといふ。父親も得意廻りの次手に寄つて見て、『まア、あれなら好い！』と賛成した。一週間の農繁休暇を利用して、愈々移轉することになつた。平生親しくした友達は多く

は離散して、其時町に居るものは、活版屋をしてゐる澤田君位のものであつた。清三は其往來した友の家々を暇乞をして歩いた。北川の家には母親が一人居た。入口ですまさうとするのを、『まアまア本當にお久し振でしたね』と無理に奥の座敷へと請された。美穂子に就ては、『あれも今年に卒業するのですけれど、意氣地がなくなつて、學校が勤まりますか何うですか』などと言つた。移轉のことを聞いては『まアまアお名残惜しい、……けれどまア貴君の身體がお定りになつて、御引越なさるんですから、結構ですれえ、お母さんも嗚ぞ御喜びでせう。薫が居れば、御手傳位致すんですけれど、あれも此の七月には戦地に參るさうですから……』それからそれと、戦争の話やら町の話やらが續いた。母親の眼には、蒼白い顔をした眼の濁つた體の瘦せた清三の姿が映つた。忍沼の錆びた水にはみぞかくしの花がところどころに白く見えた。加藤の家には母親も繁子も留守で、めづらしく父親が居

た。上つて教育上の話などを一時間ばかりもした。羽生から今すこし近い處に好い口があったら、轉任させて貰ひたいといふことも頼んだ。石川の店では、小僧が忙がしさうに客に應對して居た。其處へ番頭が向ふから自轉車をきしらしらして歸つて来て、ひらりと飛び下りた。澤田さんは眞黒になつて働しながら、「此方の方に來た時には是非寄つて下さい」と言つた。清三は最後に弟の墓を訪うた。祖父の墓は足利にある。祖母の墓は熊谷にある。かうして、ところ／＼に墓を残して行く一家族の漂泊的生活をかれは考へて黯然とした。一人他郷に残される弟はさびしからうなどとも思つた。あぢさゐの花は墓を明るくした。道具とともない一家の移轉の準備は簡單であつた。箆筒と戸棚とを薦で絡げ、夜具を大きなさいみの風呂敷で包んだ。陶器は總て壊れぬやうに、箆筒の衣類の中や蒲團の中などに入れた。最後に椿や南天や草花などを掘つて、根を薦包にして庭の一隅に置いた。

降るかと思つた空は午前の中に晴れた。荷物を満載した三臺の引越車はガラ／＼と町の大道を輾つて行く。ところ／＼で、母親と清三とが知人に邂逅して挨拶して居るさまが浮き出すやうに見える。車の一番上に積れた紙屑籠につめたランプのホヤがキラ／＼と光る。長野の手前で、額が落ち懸りさうになつたのを清三は直した。母親はにこ／＼と嬉しうな顔色で、いろ／＼な話をしながら歩いて行く。熊谷から行田に移轉した時の話が出る。「かうして、大した迷惑を人にもかけずに、晝間引越して行かれるのは、皆なお前のお蔭だよ」などと言つた。長野を外れやうとする處で、向ふから號外賣が景氣よく鈴を鳴して走つて來た。清三は呼留めて一枚買つた。竹敷を出た上村艦隊が暴雨の爲めに敵を逸して歸着したといふことが書いてある。車力は、「残念ですなア。敵をにがして了つて……常陸丸では此近邊で死んだ人がいくらもあるはず。佐間では三人まであるはず。」などと話し

合つた。

ある豪農の塀の前では、平生引越車などに見馴れないので犬が吠えた。榛の並木に沿つた小川では、子供が泥だらけになつて、さで網で雑魚をすくつて居る。繭賣の車がぞろぞろ通つた。

新しい家では、今朝早く来た父親と、局を休んで手傳に來て呉れた萩生さんとが、バタバタ疊を叩いたり、雑巾がけをしたり、破れた障子を繕つたりして居た。大家さんは火鉢と茶道具とを運んで來て、にこ〜笑ひながら、「何か要るものがありましたなら遠慮なく仰しやい」と言つて、兀頭に頑冠をして尻をまくつた父親の姿を立つて見て居た。それも十二時頃には大抵片附いて、蕎麥屋からは蕎麥を持つて來る。萩生さんは買つて來た大福餅を竹の皮包から出して頬張る。其處の小路にガタ〜と車の入る音がして、清三と母親

の顔が見えた。

車力は繩を解いて、荷物を庭口から縁側へと運び入れる。父親と萩生さんが先に立つて箆箆や行李や戸棚や夜具を室内に運ぶ。長火鉢、箆箆の置多所を、あれのこれのと考へる。母親は襷がけになつて、勝手道具を片付けて居たが、其處に清三が外から來て、呼吸を切して水を飲んだ。

母親は手を留めて、じつと見て、

『何したの？』

『少し手傳つたら、呼吸が切れて仕方がない』

『お前は無理をしてはいけないよ。父さんがするから、餘り働かすにお置きよ』
此頃、殊に弱くなつた清三が、母親には此上ない心配の種であつた。

やがて何うやら彼うやら四邊が片附く。『かうして見ると、中々住心地がいい』と父親は、長火鉢の前で茶を飲みながら言った。車力は庭の縁側に並んで、振舞はれた蕎麥をツルツル啜つた。

清三と萩生さんは二階に上つて話した。南と西北とが明いて居るので風通しがいい。それに裏の大家の庭には、栗だの、柿だの、木犀だの、百日紅だのが繁つて居る。青空に浮いた白い雲が日の光を帯びて、緑と共に光る。二人は足を投げ出して、暢氣に話をして居ると、其處に母親が茶を淹れて持つて来て呉れる。大福餅を二人して食つた。

夜は清三は二階に寝た。久し振で家庭の團樂の楽しさを味つたやうな氣がする。兩戸を一枚明けたところから、緑を飾したすゞしい夜風が入つて、蚊帳の青い影が微かに動いた。かれは真中に廣く蒲團を敷いて、闇の空にチラ／＼する星の影を見ながら寐た。母親が階

子を上つて来て、開放した兩戸をそつとしまめて行つたのはもう知らなかつた。

翌日は彌勒に出懸けて、人夫を頼んで、書籍寢具などを運んで来た。二階の六疊を書齋にきめて、机は北向に、書箱は壁につけて並べて置いて、三尺の床は古い幅物を懸けた。萩生さんが持つて来て呉れた菖蒲の花に千鳥草を交せて相馬焼の花瓶に挿した。『かうして見ると、學校の宿直室よりは、いくら好いか知れぬ』と萩生さんは四邊を見廻して言つた。親しい友達が同じ町に移轉して来たので、何となくうれしさうに莞爾して居る。寺の本堂に寄宿して居る頃は、清三は萩生さんを唯情に篤い人、親切な友人と思つただけで自分の志や學問を語る相手としては常に物足らなく思つてゐた。何うしてあゝ野心が無いだらう。何うしてあゝ普通の平凡な世の中に安心して居られるだらうと思つて居た。時には自分とは人間の種類が違ふのだとさへ思つたことがある。それが今では丸で變つた。

かれは日記に『萩生君はわが情の友なり、利害、道義以て此間を犯し破るべからず』と書いた。また『曾て此友を平凡に見しは、わが眼の發達せざりし爲めのみ。萩生君に比すれば、われは甚だ世間を知らず、人情を解せず、小畑加藤を此友に比す、今にして初めて平凡の偉大なるを知る』と書いた。

前の足袋屋から天ぶら、大家から川魚の鹽焼を引越の祝ひとして重箱に入れて貰つた。いづれも『あいそ』といふ鱗の粗い腹の側の紅色をした魚で、今が利根川で獲れる筋だといふ。米屋、炭屋、薪屋なども通ひを持って來た。父親は隣近所の組合を一軒一軒廻つて歩いた。清三は午後から二階の六疊に腹這ひになつて、東京や行田や熊谷の友人達に轉居の端書を書いた。寺にも出かけて行つたが、丁度葬式で、和尚さんは忙しがつて居たので、轉居したことを知らせて置いて歸つて來た。

大家の主人は面白い評好きの人であつた。店は息子に譲つて、自分は家作を五軒ほど持つて、老妻と二人で暮らし居るといふ暢氣な身分、釣と植木が大好きで、朝早く大きな麥稈帽子を冠つて、箒箆を下げて、釣竿を持つて、霧の深い間から木槿の赤く白く見える垣の間の道を、てく／＼と出かけて行く。そして日の暮れる頃には、箒箆の中に金色をした鯛や鯉をゴチャゴチャ入れて歸つて來る。店子はをり／＼播鉢に見事な鯛を入れて貰ふことなどもある。釣に行かぬ時は、大抵腰を曲げて盆栽や草花などを丹念にいち／＼くつて居る。さうかと言つて別に大したものがあるでもない。楓に、樺に、檜に、蘇鐵位なものだが、それを内に入れたり出したりして、樂しみさうに眺めて居る。花壇にはいろ／＼西洋種も蒔いて、天竺牡丹や遊蝶草などが咲いて居る。コスモスも大分大きくなつた。また時には、跣足になつて垣の隅の島を一生懸命に耕して居ることなどもあつた。

農繁休暇は尙暫し續いた。一週間で授業を始めて見たが、麥刈養蠶田植などがまだすつかり終らぬので、出席生徒の数は三分の一にも満たなかつた。で、今一週間休暇をつゞけることにする。清三は午後は二階の風通の好い處でよく晝寐をした。餘り長く寐込んで西日に照されて、汗をぐつしよりかいてゐることなどもあつた。町も郊外も暫しの間はめづらしく、雨の降らぬ日には、大抵晝架を擔いで、寫生に出かけた。警察の傍の道に沿つた汚い溝には白い小さい花がボチ／＼咲いて、錆びた水に夢見るやうな赤いねむの花が微かに映つた。寺の門、町外れから見たる日光群山、桑畑の鷄、路傍の吹井、うどんひもかばと書いた大和障子などの寫生が段々出來た。

夜は大家の中庭の縁側に行つて話した。戦争の話がいつも出る。二三日前萩生さんから借りた戦争畫報を二三冊又借して遣つたが、それに就いてのいろ／＼の質問が出る。『何う

ももう旅順が取れさうなものですかなア』と、さも悟かしさうに主人は言つて、『それにもう、陸軍の方も餘程行つたんでせう。第一軍は九連城を取つてから、ねつから進まんぢやありませんか。第二軍は蓋平からもう餘程行つたんですか』

清三は新聞や雜誌で得た知識で、第一軍第二軍が近い中に連絡して遼陽のクロバトキン將軍の本營に追る話をして聞かした。旅順の方面については、海陸共に犄々と押寄せて、敵はもう袋の鼠になつて了つたから、此方の方は遼陽よりも早く片附く筈である。『來月の十五日位までには屹度取れるツて、校長なども言ふんです。私は今少し遅くなるかも知れないと思ひますけれど、何しろもう直きですな』などと清三は言つて聞かせた。

『何んしろ、日本は小さいけれども、舉國一致ですから敵ひませんやな。何んな百姓でも無智な人間でも、戦争ツて言へば一生懸命ですからな……天子様も國民の後援があつて、

「嘘ぞ御心丈夫でいらつしやるでせう」と感嘆したやうな調子で言つて、『日本は昔からお武士で出来た國ですからなア!』

大家はまた釣の話をして聞かせることがあつた。清三が胃腸に悩んで居るとかいふのを聞いて、『何うです、一つ一緒に出かけませんか。さういふ病氣には、氣が落付いてごく好いですがな』こんなことを言つて誘つた。其場所は此處から一里位行つた處で、田の處々に堀切がある。其處には芦荻が人をかくす位に深く生茂つてゐる。鮎や鯉やたなごなどの澤山居ると居ないのがある。その居る處を大家さんはよく知つて居た。

二人で話して居る縁側の上に、中老の品の好い細君は、岐阜提燈を吊してくれた。

時には母親と萩生さんと三人つれ立つて町を歩くこともあつた。今年は『から梅雨』で雨が少なかった。六月の中頃に既に寒暖計が八十九度まで上つたことがあつた。七月に入

つてから、俄かに暑さが烈しく、田舎町の夜には、縁臺を店先に出して、白地の浴衣をくつきりと闇に見せて、團扇をバタ／＼させて居る群が其處にも此處にも見えた。母親は買物をする町の店に熟して居ないので、さうした夜の散歩には、萩生さんが此處が乾物屋、此處が荒物屋、呉服屋では此處が一番堅いなどと教へて呉れた。下駄屋の店には、中年の上さんが下駄の鼻緒の並んだ中に白い顔を見せて坐つて居た。鍛冶屋にはランプが薄暗くついて、奥では話聲がきこえて居た。水のやうな月が白い雲に隠れたり顯はれたりして、其度毎に纏れた三つの影が街道に映つたり消えたりする。

用水の橋の上は涼しかった。納涼に出た人がぞろ／＼通る。冬や春は川底に味噌渡のこはれや、バケツの捨てたのや、陶器の欠片などが汚く殺風景に見えて居るのだが、此頃は水が一杯に漲り流れて、それに月の光や、橋の傍に店を出して居る氷屋の提燈の灯影がチ

ラ〜と映る。流れる水の影が淡く暗く見える。向ふの料理店から、三絃の音が聞えた。三人は氷店に休んで行くこともある。母親は歸りに、八百屋に寄つて、茄子や白瓜などを買ふ。局の前で、清三は母親を先に歸して、荻生さんの室で十時過まで話して行くことなどもあつた。

五十一

七月十五日の日記にかればかう書いた。

『杜國亡びてクルーゲル今又歿す、瑞西の山中には肺に斃れたるかれの遺體は、故郷のわが妻の側に葬らるべし。英雄の末路、言は陳腐なれど、事實は常に新たなり。英雄クルーゲル！元トランスヴァール共和國大統領ホウル・クルーゲル歿す、歴史は常にかくの

如し。

五十二

醫師は矢張胃腸だと言つた。けれど薬はねつから効がなかつた。咳が絶えず出た體が怠るくつて仕方がなかつた。ことに、熱が時々出るのに一番困つた。朝は病氣が直つたと思ふほどいつも氣持が好いが、午後からは屹度熱が出る。止むなく發汗劑を服むと、汗がびつしよりと出て、其心持の悪いこと一通でない。顔には血の氣がなくなつて、肌が厭に黄ばんで見える。かれは幾度も蒼白い手を返して見た。

『お前本當に何うかしたのぢやないかれ。しつかりした醫師にかゝつて見る方が好いんぢやないかれ』

母親は心配さうにかれの顔を見た。

學校はやがて始つた。暑中休暇まではまだ半月ほどある。それに七時の授業始なので、朝が忙しかった。母親は四時には遅くも起きて竈の下を焚附けた。清三は薬瓶と辨當をかへて、例の道を行くと歩いて通つた。一里半の通ひ馴れた路——それにもかれば著しい疲労を覚えるほどその體は弱くなつて居た。それに、此頃では滋養品を成だけ多く取る必要があるので、毎日牛乳を二合、鶏卵を五箇、その他肉類をも食つた。移轉の借金はまだ返さぬのに、毎日かうして少なからざる金がかゝるので、かれの財布は常に空であつた。馬車に乗りたくも、そんな餘裕はなかつた。

五十三

八阪神社の祭禮は賑かであつた。當年は不景氣でもあり、國家多事の際でもあるので、山車も屋臺も出来なかつたが、それでも近在から人が出て、紅い半襟や淺黄の袖口やメリンスの帯などがぞろ／＼と町を通つた。かういふ人達は、氷店に寄つたり、瓜店の前で庖丁で皮を剥いて貰つて立食をしたり、よせ切の集つた呉服屋の前に長い間立つてあれのこれのといぢくり廻したりした。大きな朱塗の獅子は町の若者にかつがれて、家から家へと悪魔をばらつて騒しくねり歩いた。

清三が火鉢の傍に居ると、傍の小路に、わいしよくといふ騒しい懸聲がして、突然獅子が入つて來た。草鞋をはいた若者は、何の會釋もなく、其儘づか／＼と疊の上にあがつて、『やあ!』

と大きな獅子の口をあけて、其儘勝手元に出て行つた。

母親は紙に包んだおひねりを獅子の口に入れた。一人息子の爲めに、悪魔を拂ひ給へ！と心に念じながら……。

五十四

母親は二階の床の間に、燃ゆるやうな撫子と薄紫のあざみと眞白なおかとのなと黄いこがねをぐるまを交せて生けた。時には窓の處にじつと立つて、夕暮の雲の色を見て居る事もあつた。其やせた後姿を清三は悲しいやうなさびしいやうな心地でじつと見守つた。父親は二階の格子を取外して呉れた。光線は流るゝやうに一室に漲り渡つた。窓の下には足長蜂が巢を醸してブンブン飛んで居た。大家の庭樹のかけには一本の若竹が伸びて、それに朝風夕風が裊やかに當つて通つた。

五十五

五月六日には體量十二貫五百目、此頃郵便局でかゝつて見ると、單衣のまゝで十貫六百目。

萩生さんは十三貫三百目。

ある日、田原ひで子が學校に来て手紙を小使に頼んで置いて行つた。手紙の中には、手づから折つた黄い野菊の花が封じ込んであつた。『野の菊は妾の愛する花、師の君よ、師の君よ、此花をうつくしと思ひたまはずや』と書いてあつた。

暑中休暇前一二日の出勤は、かれに取つてことに辛かつた。其の初めの日は歸途に驟雨に逢ひ、後の一日は朝から雨が横さまに降つた。かれは授業時間の間々を宿直室に休息

せればならぬほど困憊してゐた。それに今月の月給だけでは、薬代、牛乳代などが拂へぬので、校長に無理に頼んで三圓だけ都合して貰つた。

旅順陥落の賭に負けたからとて、校長は鶏卵を十五個呉れたが、それは實は病氣見舞のつもりであつたらしい。教員達は、『もう何の彼のと言つても旅順はぢきに相違ないから、其時には休暇中でも、是非學校に集つて、萬歳を唱へることにしやう』など言つて居た。清三は八月の月給を月の二十一日に貰ひたいといふことを豫め校長に頼んで、馬車に乗つて辛うじて歸つて來た。

暑中休暇中には、何うしても快復させたいといふ考で、清三は醫師を變へて見る氣になつた。此度の醫師は親切で評判な人であつた。診察の結果では、何うもよく解らぬが、十二指腸かも知れないから、一週間ばかり經つて大便の試験をして見やうと言つた。肺病で

はないかと訊くと、さういふ兆候は今のところでは見えませんと言つた。今のところといふ言葉を清三は氣にした。

五十六

滋養物を取らなければならぬので、錢も無いのに、いろ／＼なものを買つて食つた。鯉、鰻、牛肉、雞肉——ある時はいさぎを賣りに來たのを十五錢に買かせて買つた。嘴は淺綠色、羽は暗褐色に淡褐色の斑點、長い足は美しい淺綠色をして居た。それを粗く潰して、骨をトン／＼と音させて叩いた。それにすらかれば疲勞を覺えた。

泥鰌も百匁位づゝ買つて、猫にかゝられぬやまに桶に重石をしてゴチャ／＼入れて置いた。十尾位づゝを自分で割いて、雞卵を引いて煮て食つた。寺の後にはこの十月から開通

する東武鐵道の停車場が出来て、大工が頻りに鉋や手斧の音を立て、居るが、清三は氣分の悪い夕方などには、てく／＼出かけて行つて、ぼつれんとして立てそれを見て居ることがある。時には向ふの野まで行つて花をさがして來ることもある。えのころ、おびしげ、ひよとりそり、おときりそり、こまつなぎ、なでしこなどがあつた。

新聞には其頃大石橋の戦闘詳報が載つてゐた。遼陽！ 遼陽！ といふ文字が到る處に見えた。

ある日、母親は急性の胃に侵されて、裁縫を休んで寢て居た。物を食ふとすぐ吐した。そして吃逆も烈しく出た。土用の明けた日で、秋風の立つたのが何處となく木の葉のそよぎに見える。座敷に射し入る日光から考へて。太陽も少しは南に廻つたやうだなどと清三は思つた。其處に郁治がひよつくり高等師範の制帽を冠つた姿を見せた。此間中から歸省

して居て、いづれ近い中に新居を訪問したいなどといふ端書を遣したが、今日は加須まで用事があつて遣つて來たから、ふと來る氣になつて訪れたといふ。郁治は清三の瘦せ衰へた姿に少なからず驚かされた。それに顔色の悪いのが殊に目立つた。

親しかった二人は、夕日の光線の射込んだ二階の一間に相對して坐つた。相變らず親しげな調子であるが、言葉は容易に深く觸れやうとはしなかつた。時々話の途絶えて黙つて居ることなどもあつた。

『小畑は此間日光に植物採集に出掛けて行つたよ』

こんなことを言つて、郁治は途絶え勝なる話をつゞけた。

清三は、『君、歸つたら、フアザーに一つ頼んで見て呉れ給へな。どうもかう體が弱つては、一里半の通勤は随分辛いから、この町か、近在かに何處か轉任の口はないだらうか』

て。……彌勒ももう随分古參だから、居心地は悪くはないけれど、いかにしても遠いから
れ、君』

かう言つて轉任運動を頼んだ。

夕餐には昨夜猫に取られた泥鰌の残りを清三が自分で割いて御馳走した。母親が寐て居るので、父親が水を汲んだり米を炊いたり漬物を出したりした。

郁治は見兼ねて餘程歸らうとしたが、彼方此方を歩いて疲れて居るので、一夜泊めて貰つて行くことにした。

『郁さんが折角お出下すつたのに、生憎私がいんな風で、何も御馳走も出来なくつて、本當に申譯が無い』

しげくと母親は郁治の顔を見て、

『郁さんのやうに、家のも丈夫だと好いのだけれど……何うも弱くつて仕方がないんですよ。……それに郁さんなぞは、學校も卒業さへすれば、どんなにも立派になれるんだから、母さんももう安心なものだけれど……』

染々とした調子で言つた。

美穂子の話が出たのは、二人蚊帳の中に入つて寐てからであつた。學校を出るまではお互に結婚はしないが、親と親との間の口約束はもうすんだといふことを郁治は話した。

『それはお目出度い』

と清三が眞面目に言ふと、

『約束を定めて置くなつて、君、つまりらぬことだよ』

『何うして?』

『だつて、お互に弱點が見えたり何かして、途中で厭になることがないとも限らないからね』

『そんなことはいかんよ、君』

『だつて仕方がないさ、さういふ氣にならんとも限らんから』

『そんな不眞面目なことを言つてはいかんよ。君たちのやうに前から氣心も知ればお互の理想も知つて居るのだから、苦情の起りにはありやしないよ。僕なども同じ仲間だから、君等の幸福なのを心から祈るよ。美穂子さんにも久しく逢はないけれど、僕がさう言つたつて言つて呉れ給へ』

いつもの軽い言葉とは聞かれぬほど眞面目なので、

『うむ、さう言ふよ』

と郁治も言つた。

蚊帳の外のランプに照された清三の顔は蒼白かつた。咳が絶えず出た。熱が少し出て来たと言つて、枕元に持つて来て置いた水で頓服劑を飲んだ。二人の胸には、中學校時代、『行田文學』時代のことが思出されたが、しかも二人とも何事をも語らなかつた。郁治の胸には花やかな將來が浮んだ。『不幸な友！』といふ同情の心も起つた。

餘り咳が出るので、脊を叩いてやりながら、

『何うもいかんね』

『うむ、治らなくつて困る』

汗が寢衣を透した。

『石川は何うした？』

と、暫くしてから、清三が訊いた。

『つい、此間、東京から歸つて来た』と郁治は言つて、『餘り道樂をするものだから、家でも困つて、今度足留めに、愈々嫁さんが来るさうだ』

『何處から？』

『何でも川越の財産家で跡見女學校に居た女ださうだ。容色望みといふ條件でさがしたんだから、屹度別嬪さんに違ひないよ』

『先生も變つたね？』

『本當に變つた。雑誌をやつてる時分とは丸で違ふ』

それから同窓の友達の話がある／＼出た。窓からは涼しい風が入る……。

翌朝、郁治が眼を覺した頃には、清三は階下で父親を手傳つて勝手元をして居た。今更

ながら、友の衰弱したのを郁治は見た。小畑に聞いたが、これほどは思はなかつた。朝の膳には味噌汁に鶏卵が落ちてあつた。清三は牛乳一合にパンを少し食つた。二人は二階にまた坐つて見たが、もうこれと言つて話もなかつた。

郁治が歸る時に、

『それぢや學校の話、一つ運動して見て呉れ給へ』

清三は繰返して頼んだ。

母親の病氣は捲々しくなかつた。三度々々食物も満足に咽喉に通らなかつた。父親が商賣に出た後では、清三がお粥を拵へたり、好きなものを通りに出て買つて来て遣つたりする。また父親と縁側に東京仕入の瓜を二つ三つ桶に浮かせて、皮を厚く剥いて二人して旨さうに食つて居ることもある。さういふ時には清三は皿に瓜の裂いたのを二片三片入れて、食

ふ食はぬに拘らず、先づ母親の寢てゐる枕元に置いた。母子の情合は病んでから一層厚くなつたやうに思はれた。何うかすると、清三の顔をじつと見て、母親が涙をこぼして居ることもあつた。清三はまた清三で、滅多に床に就いたことのない母親の長い病氣を氣にして醫師に懸ることをうるさく勤めると、『お前の薬代さへ大變なのに、私まで懸つては、それこそ仕方がない。私のはもう治るよ、明日は起るよ』と母親は言つた。

二階の一間は新聞が飛ぶほど風が吹通すこともあれば、裏の樹の上に夕月が美しくかゝつて見えることもあつた。けれど東が寒がつて居るので、朝日には常に縁遠く清三は暮した。朝の眺めとしては、早起をした時、北窓の雲に朝日が燃えるやうにてり榮えるのを見る位なものであつた。

彌勒野は此頃は草花がいつも盛りであつた。清三は關さんに手紙を書いた。此頃は座敷

の運動のみにて、野に遠ざかり居り候へば、草花の盛りも見ず、遺憾に候、彌勒野、才塚野、君の採集にはさぞめづらしき花を加へ給ひしならん。秋海棠今歳は花少く、朝顔もいはり種なく、さびしく暮し居り候』

毎日二三回つゝの下痢、胃は常に烈しき渴きを覺えた。動かすにじつとして居れば、健康の人といくらも變らぬほどに氣分が快いが、労働すれば、すぐ疲れて力がなくなる。醫師は一週間目に大便の試験をしたが、十二指腸蟲は一疋も居ず、ペン蟲の卵が一つあつたばかりであつた。けれどこれは寄生蟲でないから害はない、普通健康體にもよくゐる虫だと醫師はのんきなことを言つた、母親の病氣はまだすつかり治らなかつた。もう彼は十二三日になる。按摩を頼んでもませて見たり、御祈禱を近所の人遣つて來て上げて呉れた。次手に清三もこの御祈禱を上げて貰つた。

清三は此頃から夜が眠られなくて困つた。いよく不眠性の容易ならざる病状が迫つて来たことを醫師は漸く気が付き始つた。旅順の海戦——彼我の勝敗の決した記憶すべき十日の海戦の詳報の類りに出る頃であつた。アドミラル、トオゴアの勇しい名が世界の新聞雑誌に記載せらるゝ頃であつた。

醫師はある日遣つて来て、狼狽く言つた。『どうも永久的衰弱ですからなア』かう言つてすぐ言葉を續いで、『餘り無理をしてはいけません。第一、少しよくなつても、一里半も學校に通つてはいけません。一年位は海岸にでも行つて居ると好いですがな』それから葡萄酒を飲用することを勧めた。

五十七

醫師の言葉を書いて、是非九月の學期までに近い所に轉任したいが、君に一任してよきや、自から運動すべきやと郁治の許に書いてやると、折かへして返事が来て、視學に直接に手紙をやれ、羽生の校長にも聞いて見る。自分も其中出かけて運動をしてやると書いてあつた。

段々秋風が立始めた。大家で飼つて置いたくさひばりが夕暮になるといつも好い聲を立て、鳴いた。床柱の薔薇の一輪挿、それよりも簀戸を透して見える朝顔の花が友禪染のやうに美しかった。

一日、午後四時頃の暑い日影を受けて、例の街道を彌勒に行く車があつた。それには清三が乗つて居た。月の俸給を受取る爲めにわざ／＼出懸けて来たのであつた。學校はからんとして、小使も居なかつた。關さんも、昨日浦和に行つたとて不在であつた。

宿直室には半は夕日が射し透つた。テニスを遣るものも無いと見えて、綱もラツケツトも縁側の隅に徒に束ねられてある。事務室の硯箱の蓋には塵埃が白く、椅子は卓の上の載せて片附けられたまゝになつて居る。影を長く校庭に曳いた清三の瘦せ果てた姿は徐かに廊下をたどつて行つた。

教室に入つて見た。ホールドには、授業の最後の時間に數學を教へた數字が其儘になつて居る。12+15=27と書いてある。チヨークも其時置いたまゝになつてゐる。此處で生徒を相手に笑つたり怒つたり不愉快に思つたりしたことを清三は思ひ出した。東京に行く友達を羨み、人しれぬ失戀の苦みに悶えた自分が、丸で他人でもあるかのやうに分明と見える。色の白い、肉づきの好い、赤い長襦袢を着た女も思ひ出された。

オルガンが講堂の一隅に塵埃に白くなつて置かれてあつた。何か久し振で鳴らして見や

うと思つたが、只思つただけで、手を下す氣にはなれなかつた。

やがて小使が歸つて來た。かれも鳥渡見ぬ間に、清三のいたく衰弱したのに吃驚した。じろくくと不氣味さうに見て、

『何うも、病氣が好くねえかね?』

『何うもいかんから、近い處に轉任したいと思つて居るよ……今度の學期にはもう來られないかも知れない。長い間、御馴染になつたが、何うも仕方がない……』

『それまでには治るだべいかな』

『どうも難かしい——』

清三は嘆息をした。

小川屋にはもう娘は居なかつた。此春、加須の荒物屋に嫁いて行つた。おばあさんが茶

を運んで来た。

すぐ目につけて、

『林さんなア、何うかしたかね』

『どうも病氣が治らなくつて困る』

『それア困るだね』

染々と同情したやうな言葉で言つた。夕飯は粥にして貰つて久し振でさいの煮附を取つて食つた。庭には雞頭が夕日に赤かつた。かれは柱に凭りかゝりながら、野を過ぎて行く色ある夕の雲を見た。

五十八

轉任に就いては、郁治も来て運動して呉れた。町の高等も尋常も聞いて見たが、缺員がなかつた。彌勒の校長からは、『不本意ではあるが、病氣なれば仕方がない、好いやうに取計らうから安心し給へ』と言つて来た。けれど他から見れば、もう教員が出来るやうな體ではなかつた。

ある日、萩生さんが、母親に、

『どうも今度の病氣は用心しないといけないつて醫師が言ひましたよ。何うも肺といふ徴候はないやうだが、唯の胃腸とも違ふやうなところもあると言つてました。何にしても足に腫氣が来たのはよくないですな……醫師の見立が違つてゐるのかも知れませんが、行田の原田に伴れて行つて見せたら何うです？ 先生は學士ですし、評判が好い方ですから』
そして、さういふ積があるなら、自分が一日局を休んで連れて行つて遣つても好いと言

つた。

『何れも、御親切に……御禮の申上げやうもない』

母親の聲は涙に曇つた。

彌勒に俵給を取りに行つた翌日あたりから、脚部大腿部にかけて夥しく腫氣が出た。足も今までの足とは思へぬほどに甲がふくれた。それに、陰囊も其影響を受けて起居にも段々不自由を感じて来る。醫師は罌法劑と寧丸帶とを與へた。

蘇鐵の實を煎じて飲ませたり、御祈禱を枕元であげて貰つたり、不動岡の不動様の御符を戴かせたり、苟も効驗があると人の教へて呉れたものは、何んなことでもして見たが、効がなかつた。秋風が立つにつれて、容體の悪いのが目に立つた。

やがて孟蘭盆が來た。町の大通りには草市が立つて、芋殻や藎蓆やみそ萩や草花が並べ

られて、在郷から出て來た百姓の娘達がぞろ／＼通つた。寺の和尚さんは紫の衣を着て、小僧をつれて、忙しさに町を歩いて行つた。茄子や白瓜や胡瓜でこしらへた牛や馬。其の尻尾には鳥から取つて來た玉蜀黍の赤い毛を使つた。何處の家でも芋殻で杉の葉を編で、佛壇を飾つて、代々の位牌を掃除して、萩の餅やら團子やら新里芋やら玉蜀黍やら梨やらを供へた。

女の兒は新しい衣を着て、嬉々として彼方此方に遊んで居た。

十三日の夜には迎へ火が家々で焚かれる。通りは警察が喧しいので、昔のやうに大仕掛な焚火をするものもないが、少し裏町に入ると、薪を高く積んで火を燃して居る家などもあつた。周圍に集つた子供等は面白がつてそれを飛んだり跨いだりする。清三の家では、其日父親が古河に行つてまだ歸つて來なかつたので、母親は一人でさびしさうに入口に蹲

駈つて、葦がらを集めて形ばかりの迎火をした。大家の入口にも今少し前焚いた火の残りが赤く闇に見える。

軒には昨年の盆に清三が手づから書いた菊の繪の燈籠が下げてある。清三は便所に通ふのに不慣なので、四五日前から、床を下下の六疊に移した。

風にゆらぐ盆燈籠をかれはじつと見て居た。大家の軒の風鈴の鳴る音が微かに聞える。佛壇には灰がついておて、蓮の葉の上に供へた團子だの、茄子や白瓜でつくつた牛馬だの眞鍮の花立に挿したみそ萩などが額縁に入れた繪のやうに見える。明るい佛壇の中は何だか別の世界でもあるかのやうに清三には思はれた。

母親が其處に入つて来て、

『病氣でないよ、政一(弟の名)の處にもお参りに行つて貰ふんだけど……今年花も上

げて呉れる人もないよさびしがつて居るだらう』

『本當にさ……』

『父さんが都合が好ければ行つて貰ひたいと思つて居たんだけど……』

『本當に、遠くなつて淋しがつて居るだらう』

清三は亡くなつた弟を染々思つた。

『明日あたり私がお参りに行かうかとも思つて居るけれど……』

『ナアに、治つてから行くから好いさ』

暫く黙つた。

母子の胸には今月の拂のことが支へて居る。薬代、牛乳、それだけでもかなり、多い。今月は父親のかせぎがねつから駄目だった上に、母親も病氣で毎月ほど裁縫をしなかつた。

先程、醫師から勘定書を書生が持つて来たのを母親は申譯なさうにことわつて居た。
『なアに、父さんが歸つて来れば、何うにかなるから、心配せずにお出でよ』
と母は其時言つた。

父親が歸つて来ても駄目なことを清三は知つて居る。

『病氣さへしなけりやなア』

と清三は突然言つた。

やがて言葉をついで、『こんな病氣にかゝりさへしなけりや、今年はちつとは母さんにも
樂をさせられたのになア』

母親はオド／＼して、

『そんなことを思はない方が好いよ。それより養生して……』

『ナアに、こんな病氣に負けて居りやせんから、母さん。心配しない方が好いよ。今死ん
では、生れて来た甲斐がありやしない』

『本當ともねえ、お前』

『世の中と謂ふものは思ひのまゝにならないもんだ！』

言葉は強かつたが、一種の哀愁は佛壇の灯のみ明るい一室に充ち渡つた。

隣近所では病人が日増に悪くなるのを知つた。醫師が毎日靴を下げて遣つて来る。荻生
さんが心配さうな顔をしてちよい／＼裏から入つて来る。一週間前までは、蒼白い瘦せ果
てた顔をして、頭髮を蓬々させて、其處等をぶら／＼して居る病人の姿を人々はよく見懸
けたが、此頃では、もうどつと床に就いて、枕を高く、瘦せこけて卑斯のやうになつた手

を蒲團の外に放出すやうにして寐て居るのが垣の間から見える。井戸端などで母親に容體を聞くと、『何うも少しでも好い方に向つてくれると好いのですけれど……』と言つて、さもしく心配に堪へぬやうな顔をした。

肺病だらうといふことは誰も皆前から想像して居た。『何うも咳嗽の出るのが變だと思つてました』と隣の足袋屋の細君が言つた。『何うも肺病だつてな、あの若いのに氣の毒だなア。好好きな面白い人だのに……』と大家の主人も老妻に言つた。『一人息子をあれまで育て、これからかゝらうといふ矢先にそんな悪い病氣に取つかれては……』と老妻は泌々と同情した。彼方此方から見舞を持つて行くものなども段々多くなる。大家の主人がある日一日釣つて來た鮎を摺鉢に入れて持つて行つてやると、めづらしがツて、病人はわざわざ起きて來て見た。それから梨を持つて來るものもあれば、林檎を持つて來るものもある。

中には五十錢銀貨を一つ包んで來るものもあつた。

轉任の難かしいこと、假令轉任が出來ても、この體では毎日の出勤は覺束ないといふことが次第に病人にも解つて來た。かれは郁治に宛て、病氣で休んでおれば何ヶ月間俸給が下るかといふことを父の郡視學に聞いて貰ふやうに手紙を書いた。やがて其返事が來て埼玉縣令十號の十三條に六十日の病氣缺席は全俸(願書診斷書附)その以後二ヶ月半俸としてあることを報じて來た。

五十九

行田の町の中程に、西洋造のペンキ塗の際立つて目につく家があつた。陶器の標札に『醫學士原田龍太郎と鮮かに見えて、門にかけた原田醫院といふ看板はもう古くなつて居た。

午前十時頃の晴れた日影は硝子を透した診察室の白いカーテンを明るく照した。診察が終つて、其處から父親と荻生さんとに扶られて出て来たのは、二三日來益々衰弱した清三であつた。荻生さんが萬一を期して、ヤイ／＼言つて伴つて来た親切は徒勞に歸した。醫師は父親と友に、絶望的宣告を與へたやうなものであつた。荻生さんが懇意なので、別室で訊くと、

『今少し早く何うかすることが出来さうなものだつた……』

醫師はかう言つた。

『矢張、肺でせうか』

『肺ですな……もう兩方共悪くなつてゐる！』

荻生さんは何うすることも出来なかつた。眼眩がして其處に立つて居られぬ病人を、殆

ど抱へるやうにして車に乗せた。『車に乗せて件れて来るのはちとひどかつたね』と言つた醫師の言葉を思出して、『醫師を招んでは車代が大變だから……五圓では上らないから、私が車に乗せて件れて行つて上げる』と言つたことを悔いた。

其の二里の街道には、矢張旅商人が通つたり、機廻の車が通つたり、自轉車が走つたりして居た。尻を捲つて赤い腰巻を出して歩いて行く田舎娘もあつた。もう秋風が野に立つて、背景をつくつた森や藁葺屋根や遠い秩父の山々が鮮かにはつきり見える。豊熟した稻は涼しい風に靡き渡つた。

幌をかけた車は徐かに街道を輾つて行つた。

七色の風船玉を賣つて歩く老爺の周圍には、村の子供が集つて居た。

六十

寺の和尚さんが鷄卵の折を持って見舞に來た。

和尚さんも暫らく逢はぬ間に、かうも衰弱したかと吃驚した。

わざと戦争の話などをする。

「旅順が何うも取れないですな」

「何うしてかう長引くんでせう」

「ステツセルも一生懸命だと見えますな。また兵力が足りなくなつて第八師團も今度旅順に向つて發つといふ噂ですな」

「第九に第十二に 第一に、……それぢやこれで四個師團……」

「どうもあそこを早く取つて了はないでは仕方がないんでせう」

「中々頑強だ！」

と言つて、病人は咳嗽をした。

やがて、

「遼陽の方は？」

「あつちの方が早いかも知れないツて言ふことですよ。第一軍はもう榆樹林子を占領して遼陽から十里の處に行つてますし、第二軍は海城を占領して、それからつと先に出てゐるやうですし……」

「本當に丈夫なら、戦争にでも行くんだがなア！」

と清三は慨嘆して、「國家の爲めに勇ましい血を流してゐる人もあるし、千載の一遇、國

家存亡の時に邂逅して、廟堂の上に立つて天下と共に憂ひてゐる政治家もあるのに……か
うして碌々として、病氣で寐てるのは實に情けない。……和尚さん、人間もさまざまです
な』

『本當ですな……』

和尚さんも笑つて見せた。

暫くして、

『原さんから便がありますか？』

『え、もう歸つて來ます。先生も海城で病氣にかゝつて、病院に一月も居たさうで……來
月の初めには歸つて來る筈です』

『それぢや遼陽は見ずに……』

『え』

衰弱した割合には長く話した。寺にゐる時分の話なども出た。
其翌日は彌勒の校長さんが見舞にやつて來た。

『こんなになつて了ひました』

と細い手を出して見せた。

『學校の方はいゝやうにして置きますから、心配せずにお出なさい、缺席届さへ出して置
くと、二月は俸給が下りるんですから』

校長さんはかう言つた。

戦争の話が出ると、

『遅くも、休暇中には旅順が取れると思つたですけれどなア。餘程難かしいと見えますな。』

此頃ちや容易に取れないなんて、悲観説が多いぢやないですか。常陸丸に色々必要な材料が積んであつた相ですな』

こんなことを言つた。

二三日して、今度は關さんが來た。女郎花と薄とを持って來て呉れた。彌勒の野から採つたのであると言つた。母親は金盃に水を入れて、取敢へず、それを病人の枕元に置いた。清三はうれしうな顔をしてそれを見た。

關さんはやがて風呂敷包みから、紙に包んだ二つの見舞の金を出した。一つには金七圓生徒一同よりとしてあつた。一つは金五圓、下に教員連の名前がすらりと並べて書いてあつた。

六十一

遼陽の戦争はやがて始つた。國民の心は總て滿洲の野に向つて注がれた。深い沈黙の中に却つて無限の期待と無限の不安とが認められる。神經質になつた人々の心は鳥渡とした號外賣の鈴の音にもすぐ驚かされるほど昂つてゐた。さうして居る間にも一日は一日と經つ。鞍山站から一押と思つた首山堡が容易に取れない。第一軍も思つたやうに出ることが出ない。雨になるか風になるか解らぬ中に、また一日二日と過ぎた。——その不安の情が九月一日の首山堡占領の二號活字で忽ちにして解かれたと思ふと、今度は鬱積した歡呼の聲が遼陽占領の喜ばしい報に連れて、凄しい勢で日本全國に漲り渡つた。

遼陽占領！ 遼陽占領！ 其聲は何んな暗い汚い巷路にも、何んな深い山奥のあばら家

にも、何んなあら海の中の一孤島にも聞えた。號外賣の鈴の音は一時間と言はずに全國に新しい詳しい報を齎らして行く。何處の家でも其話が繰返される。其の烈しかった戦のさまがいろくくに色彩を傳けて語り合はされる。太子河の軍橋を焼いて退却した敵將クロバトキンは、第一軍の追撃に逢つて全く包圍されて了つたといふ虚報さへ一時は信用された。全都國旗を以て埋まるといふ記事があつた。人民の萬歳の聲が宮城の奥まで聞えたといふことが書いてあつた。夜は提灯行列が日比谷公園から上野公園まで續いて、櫻田門附近馬場先門附近は殆ど人で埋らるゝ位であつたといふ。京橋日本橋の大通には、數萬燭の電燈が晝のやうに輝き渡つて、花電車を通る度に萬歳の聲が終夜聞えたといふ。清三はもう充分に起上ることが出来なかつた。容體は一日に悪くなつた。昨日は便所から這ふやうにして辛うじて床に入つた。でも、其枕元には國民新聞と東京朝日新聞とが

置かれてあつて、瘦せこけて骨立つた手が時々それを取上げて見る。遠陽の占領が始めて知れた時、かれは限りない喜悅を顔に湛えて、『母さん！ 遠陽が取れた！』とさもくうれしさうに言つた。それからいろくくな話を母親にしてきかせた。二千何人といふ死傷者の話をもしてきかせた。戦争の話をする時は、病氣などは忘れたやうであつた。蒼白い瘦せた顔にもほのかに血が上つた。醫師が来て、新聞などは讀まない方が好いと言つた。病人自身にしても、細かい活字を進るのは随分難義であつた。手に取つても五分と持つて居られない。疲れて、ちき傍に置いて了つた。時には半分讀み懸けた頁を、鬚の生えた瘦せた顔の上に落して、暫

くじつとして居ることなどもある。

日本が初めて歐洲の強國を相手にした曠古の戦争、世界の歴史にも數へられるやうな戦争——その花々しい國民の一員と生れて来て、其名譽ある戦争に加はることも出来ず、その萬分の一を國に報ゆることも出来ず、其喜悅の情を人並に萬歳の聲に顯はすことすらも出来ずに、かうした不運な病の床に横つて、國民の勸呼の聲を餘所に聞いて居ると思つた時、清三の眼には涙が溢れた。

屍となつて野に横はる苦痛、その身になつたら、名譽でも何でもないだらう、父母が戀しいだらう、祖國が戀しいだらう。故郷が戀しいだらう。しかしそれ等の人達も私よりは幸福だ——かうして希望もなしに病の床に横つて居るよりは……。かう思つて、清三は遙かに滿洲のさびしい平野に横つた同胞を思つた。

六十二

枕元に坐つた醫師の姿がくつきりと見えた。

父親は其れに向つて默然として居た。母親は顔を掩つて、絶えず歎歎げた。

室の中央に吊つたランプは、心が出過ぎてホヤが半は黒くなつて居た。室には陰深の氣が充ち渡つて、あたりがしんとした。鬚を長く、頬骨が立つて、眼を半開いた清三の死顔は、薄暗いランプの光の中におぼろげに見えた。

醫師の注射はもう効がなかつた。

母親の歎歎ける聲が頻りに聞える。

其處に、戸口にけたましい足音がして、白地の緋を着た荻生さんの姿があはたしく

入つて来たが、づか／＼と醫師と父親との間に割込で坐つて、

『林君！……林君！もう、とう／＼駄目でしたか！』

かう言つた萩生さんの頬を涙はホロ／＼と傳つた。

母親はまた歎歎げた。

遼陽占領の祭で、町では先程から提灯行列が幾度となく賑かに通つた。何處の家の軒にも鎮守の提燈が並んでつけてあつて、國旗が闇にもそれと見える。二三日前から今日占領の祭をするといふ廣告を彼方此方に張出したので、近在からも提灯行列の群が幾組となく遣つて来た。萩生さんは危篤の報を得て、其の國旗と提灯と雑踏の中を、人を突退けるやうにして飛んで来た。一時間ほど前には、清三は其の行列の萬歳の聲を聞いて、『今日は遼陽占領の祭だね』と言つて、その賑かな聲に耳を傾けて居た……。

今、また其行列が通る。萬歳を唱へる聲が賑かに聞える。やがて暇を告げた醫師は、丁度其處に酸漿提灯を篠竹の先につけた一群の行列が、子供や若者に取巻れてわい／＼通つて行くのに逢つた。

『萬歳！ 日本帝國萬歳』

六十三

晝間では葬式の費用がかゝると言ふので、其翌日、夜の十一時に、こつそり成願寺に葬ることにした。

萩生さんは父親を扶けて何彼と奔走した。町役場にも行けば、桶屋に行つて棺を誂へても遣つた。和尚さんは戦地から原杏花が歸るのを迎へに東京に行つて生憎不在なので、清

三が本堂に寄宿して居る頃、よく數學を教へて遣つた小僧さんがお經を讀むことゝなつた。近所の法類から然るべき導師を頼むほどの御布施が出せなかつたのである。

夜は星が聴しげにかゞやいて居た。垣には虫の聲が雨のやうに聞える。椿の葉には露が置いて、大家の高窓から洩れたランプの光線がキラ／＼光つた。樹の黒い影と家屋の黒い影とが重り合つた。

棺が小路を出る頃には、町ではもう起きて居る家はなかつた。組合のものが三人、大家のあるじ、それに父親と萩生さんとがあとについた。提灯が一つ造花も生花もない列をさびしげに照して、警察署の角から、例の溝に沿つた道を寺へと進んだ。

溝の錆びた水が動いて行く提灯の光に微かに見えた。蔽ひ冠つた樹の葉裏が明るく照されたり消えたりした。路傍の草にも、鳥にも、藪にも虫の音は絶えず聞える。一行は歩む

につれてパタ／＼と足音を立てる。誰も口をきくものはなかつた。

寺の本堂は明放されて、如來様の前に供へられた裸蠟燭の夜風にチラ／＼するのが遠くから見えた。やがて棺は昇き上られて、讀經が始つた。

丈の低い小僧はそれでも僧衣を着て、拂子を持つた。一行の携へて來た提灯は灯をつけられたまゝ、人々の並んだ後の障子の棧に引つかけられてある。廣い本堂は蠟燭の立てられてあるに拘はらず何となく薄暗かつた。父親の禿頭と萩生さんの白地の單衣が微かに其中に透されて見える。

讀經の聲には重々しい處がなかつた。厭にさえ走つたやうな調子であつた。鉦がけたたましいしい音を立てて鳴る。

『此處でかうして林君のおとむらひをしやうとは夢にも思ひがけなかつた。』

萩生さんは菓子くわしの竹皮たけのかわ包あみを懐ふところに入れてよく晝寐ひるねに此處こゝに來た頃ころのことを思おもひ出して、かう心こころの中なかに言いつた。

式しきが済すんで、階段かいたんから父親ちちが下くだると、其處そこに寺てらの上うへさんが立たつて居ゐて、

『この度たびはまア……飛とんでもないこと……それにお悔くやみにもまだ上ありも致いたしませんで……生憎あつちやう宿しゆくで留守るすなものですから』

と、きれんぐの挨拶あいさつをした。

夜よはもう薄うすら寒さむかつた。單衣ひとへ一枚まいでは肌はだが何なにとなくヒヤ／＼する。棺くわんはやがて人足ひとぞうにかつがれて、墓地ぼちへと運はこばれて行く。

選ばれたのは、島はげと寺てらとを割わつた榛はんの木きに近い處ところであつた。ひよる長い並木なみぎの影かげが夜の闇やみの中に微かかにそれと指ゆびさゝれる。垣かきの外そとに徒いたづらに暢はびた桑くわの廣葉ひろはがガサ／＼と夜風よなぞうに靡なく。

く。

穴あなは型かたのごとく掘ほつてあつた。赤土あかつちと水みづが出て、四邊あたりは踏立ふみたてられぬほど路みちがわるかつた。組合くみあひの男おとこは逸早いそばやく草履ぞうりを踏ふ込んで、買立かひの白足袋しろたびを散々まんざんにしたと言いつて居ゐる。穴掘男あなほりおとこは頭髪かみのけまで赤土あかつちだらけにしながら、『どうも水みづが多くつて、かい出だしてもかい出だしても出て來くるので、困こまつたらやれえだ！』などと言いつた。

父親ちちは提灯ちていを振ふり替かへして、穴あなをのぞいて見みた。穴あなの底そこの赤く濁にごつた水みづが提灯ちていにチラ／＼映うつつた。

萩生あきひさんも覗のぞいて見みた。

やがて棺くわんが穴あなに下くだされる。土塊つちくれのバタ／＼と棺くわんに當あたる音ねがする。時ときの間に墓はかは築まかれて小僧こぞうの僧衣そうい姿すがたが黒くろく其前そのまへに立たつたと思おもふと、例れいの調子てうし外ほかれの讀經よみきやうが始はじまつた。暗くらい闇やみの中なか

の提灯は、木槿垣を背にして立つた萩生さんの蒼白い顔と父親の禿頭と其他の群の圓く並んで居るのを微かに照した。

六十四

一年ほどして、其處に自然石の石碑が建てられて、表には林清三君之墓、下に厚知有志と刻んであつた。萩生さんと郁治とが奔走して建てたので、その醜金者の中には美穂子も雪子もしげ子もあつた。

一人息子を失つた母親は一時は殆ど生効もないやうにまで思つたが、しかしさう悔んで嘆いてばかりも居られなかつた。かれ等は老いても猶獨り働いて食はなければならなかつた。母親は息子の死んだ六疊でせつせと裁縫の針を動かした。父親の禿頭は矢張その街道

にをり／＼見られた。

墓には絶えず花が手向られた。花好の母親は其節毎の花を携へて来ては常に其前に供へた。萩生さんも羽生の局に勤めて居る間はよく墓参をした。ある秋の日、和尚さんは、廂髪に結つて、矢絣の紬に海老茶の袴を穿いた女學生風の娘が、野菊や山菊など一束にしたのを持って、寺の庫裡に手桶を借りに来て、手づから前の水草の茂つた井戸で水を汲んで林さんの墓の所在を聞いて、其前で人目も忘れて久しく泣いて居たといふことを上さんから聞いた。

『何處の娘だか』

などと其時上さんが言つた。

處がそれから二年ほどして、其墓参をした娘が羽生の小學校の女教員をして居るといふ

話を聞いた。『あの娘は林さんが彌勒で教へた生徒だとサ』と上さんは何處かで聞いて来て和尚さんに話した。

秋の末になると、いつも赤城おろしが吹渡つて、寺の裏の森は潮のやうに鳴つた。その森の傍を足利まで連絡した東武鐵道の汽車が朝に夕に凄じい響を立て、通つた。

田舎教師終

大正四年一月廿日印刷
大正四年一月卅日發行

實價金六十錢



縮刷田舎教師奥付

著作者	田山 錄 彌
發行者	東京市神田區表猿樂町二十四番地 關 宇三郎
印刷者	東京市京橋區月町二十五番地 高 橋 郁
印刷所	東京市京橋區月町二十五番地 三協印刷株式會社

發行所 東京市神田區表猿樂町二十四番地 左久良書房

文藝入門

第一篇

新片町より

島崎藤村氏著
長原止水氏裝

金五十五錢
送費金八錢

(賣發版六)

千曲川のスケッチ

島崎藤村氏著
有島生馬氏裝

金六十錢
送費金八錢

(賣發版四)

島崎藤村氏著
有島生馬氏裝

平和の巴里

菊半截判
三百余頁

金五拾五錢
送費金八錢



終

